

『深夜 (01/02)』

夜明けの雨よ
何が悲しくそぼ降る
何が寂しくてそぼ降る
道が光り
道に外灯が映える
夜明けの雨よ
屋根を街路樹を濡らし
深閑に何を輝かす

生きのやるせなさか
生きの涙か
死が有るのに
人の哭嘆(こくたん)か
私はなぜ生きる

夜明けの雨よ
朝がそんなに悲しいか
日の昇りが寂しいか
深閑を裂き始める
響きが音色に泣くのか
夜明けの雨よ
昨日は既に遠のき行き

今日が輝いている

『命 (01/26)』

人が生きるって
なんなのでしようか
いや
人が生きるって
なんなのでしようか

生きるってね
……生きるってね
五年……十年
……二十年
六十年……

春も……夏も……
秋も……冬も
生きるって
……いたい
なんなのでしようか

死ぬとは
わかりますか
……
永久の別れって
わかりますか

生きていくもの
死んでいくもの
宇宙の中で
誕生しては
消滅していく

命って
生きる事なのですか

『心 (01/30)』

雪が舞っている
花びらのように
ひらひらと
ひらひらと
雪が舞い降りている
花びらの舞のように

ひらひらと

心よ心
想いよ想い
花吹雪のように
心よ心

雪が舞っている
花びらのように
ひらひらと
ひらひらと
花びらの舞のように
雪が舞い降りている

End all 1997/01

『冬の雨 (02/16)』

冷たい雨が降っています
人の心を震えさせる寒い
雨が落ちてきます
人を育てる為に
降っているのでしょうか
花のように
春に心が咲くと言うのか
果実のように
秋に人生が実ると言うのか
冬の雨は冷たく肌に沈み
夢を凍らせて
来る春に咲かせてくれると
言うのでしょうか

『人の言う (02/17)』

人は言う
それはかなわぬ夢だと
人は言う
それは見果てぬ夢だと
でも私は
追いかけてたい自分を
生きているから
希望を明日に

自分の道を歩きたい

父は言う
私の家はどうなるのだと
母は言う
おまえが心配だと
私がおまえがここに居れば
いろいろと母は安心でしょう
父は家の盤石さを思うでしょう

お母様
私の子供の頃から
様々と世話をしてくれて
貴方自身の生き方は
何処に捨てたのですか

親父様
貴方が私ごろの時
どう思いました
貴方の親父さんは
おまえの親父は……と
孫の私にこぼしてましたよ

人の言う
見果てぬ夢は
人の言う
かなわぬ夢は
未来へ通じる道に
沢山咲いている

私は親になり
彼女は母になって
子供の世話へ
自分の人生を費やしている
このまま行けば
彼女は母親になってしまふ
女でなく女性でなく

おまえ達の世話は
これで終わりだ
さあここから出て行きなさい
さあここから出て行きなさい
外にはたくさんの花が
咲いているのだから
道を歩いていきなさい
貴方達の世話は終わったのだから
さあここから出て行きなさい

『受信 (02/17)』

社会に怒りを忘れた
若者は醜いですね
社会に順応させられた
若者は醜いですね

茶髪にしたって
優れた若者はいますよ
ピアスをしたって
優れた若者はいますよ

大人は言います
あいつは茶髪だから
駄目だ
おれたちの若い時を見ると

大人は言います
あいつはピアスをしているから
駄目だ
おれたちの若い時分はと

大人達を苦しめない
順応を持っているから
君は優秀だ
大人が言っています

大人達へ
怒りをぶつけないから
君は優れている
大人が言っています

人が人を殺す生き方を
世の中に誰がしたので
人が人を騙す生き方を
世の中に誰がしたので

『私は誰? (02/17)』

立ち止まりて
前を見れば
明日へとこの道が
続いている

立ち止まりて
振り返れば
歩いて来たこの道の
昨日が見える

今日に立って
私は誰と?
自問しても
見えて来る物はない

私は誰?
昨日を生き
明日へ続く
私は誰?

立ち止まりて
左右を見れば
みな同じように
今日に生きている

『旅人 (02/18)』

行く事の出来ぬ
宿る心よ
二月の冷たき雨に打たれ
この身は凍てつくのみ
去る事の出来ぬ
傷が
氷雨に濡れたわが身へ
刻印となるが如く
肌に染み込んでいる

春のまじかき酒場で
一人酒を呑んで
私は鳥の鳴き声を聞き
森へと通じる道を見ている
暗き鬱蒼とした森の中から
出てくる人
昼なを暗き森の中へと
入って行く人
会話の交わりを見ている

『雲 (02/18)』

朝焼けの色を
蹴散らして
今太陽が昇る
朝雲をけちらして
今太陽が昇る

陽の暖かさよ
朝日の清々しさよ
変わる事なき御身の
行動よ
変わる事なき大地の
恵みよ

人はその営みを
自らの手で
壊しているのだ
朝日を見る事なく
雲を見る事もなく

『心 (02/20)』

心よこころ
私の心よ
何に憂いて
泣いているのだ
何に震えて
心を痛めるのだ
人の世が
淋しいのか
人の世が
苦しいのか
人の世が
悲しいのか
生きて死ぬ歩みが
耐えられないのか
こころよ心
私のこころ

『音 (02/22)』

ゴーっと風が空の中を
去っていく
大木の枝をしならせて
小枝を弓のように反らせて
ゴーっと風が去っていく

電線が揺れ
土が空に舞い
枝に残っていた枯れ葉が
狂ったように宙舞散りして
ゴーツと吹き通る度に
トタンは音を発て
荒川の堤の上は
電車も止めてしまう
ゴーツと吹き去っていく度に

『笠幡駅舎 (02/28)』

夕方五時ごろには
星が見えていたのですがね
春まじかなのか
どんよりとした西陽が
霞みがかって
ホームに立つと
なにか暖かさを受け取るのです

夕方五時ごろには
星が見えていたのですがね
春のまじかさか
どんよりとした西日が

霞みがかって
ホームに立つと
ゆっくりと温かさを
嗅ぎ取るんです

冬の何もかにも透き通って
ずーっと 富士山まで眺められる
人生の厳しさは

微睡むように包まれて
これから春なのです

梅も咲いてね
白い花 桃の花

これから人生は門出なのです

一人ホームに立つて
人の姿に押されて

空まで澄んだ星の煌めく中を
そそくさと急ぎ歩きとも

さよならしなくては
帰る所のある嬉しさを

生きと人生に感謝し
道端の地蔵様へ眼が行くのです

道端の地蔵様へ眼が行くのです

夕方五時ごろには
星が見えていたのですがね
春のまじかさか
どんよりとした西日が
霞みがかって
ホームに立つと
ゆっくりと温かさを
嗅ぎ取るんです

夕方五時ごろには
星が見えていたのですがね

春まじかなのか
どんよりとした西陽が

霞みがかって
ホームに立つと

なにか暖かさを感じます

『笠幡駅舎 (二) (02/28)』

単線なんですよ

一時間に川越行きが

三本有って

高麗川・八王子行きが

三本有ります

生きるには十分でしょう
都会人は
不便さを感じますが
不便さに苛立ちますが
それは違います
人が生活するのに
一分おきに電車が走っている
そんな世界こそ
異常な社会でしょう？

単線なんですよ
一時間に川越行きが
三本有って
高麗川・八王子行きが
三本有ります

End all 1997/02